2013 8/27
No.1953
毎月第2・第4火曜日発行

政経かながわ

一般社団法人
—神奈川政経懇話会—

「キングの塔」の愛称で親しまれている県庁本庁舎（横浜市中区）がお盆休み期間の14日から３日間、初めて夜間に一般公開された。16日には本庁舎の外壁にデジタルアートを投影する「デジタル掛け軸」が披露された。

神奈川新聞社

政経かながわ

2013 8/27 No.1953

contents

視点・点描 3
「聖地巡礼」横須賀で体験

講演録 4
「参院選直前！選挙予測と安倍政権の今後
～どう変わるニッポン」
政治ジャーナリスト　　末延　吉正

経　済 8
次世代機での挽回も至難
スマホに押されるゲーム機市場

経　済 10
ＬＮＧ船の輸送力強化へ
世界的需要増に対応

くらし2013 12
分譲マンションに二つの老い

広告珍談 14
～うまい物がたり㉑
50周年、おめでとう

ＮＮＡアジア経済リポート 15

事務局だより

◇横浜定例講演会
2013年9月13日（金）
13時30分～15時
ホテルモントレ横浜
講師は日本銀行横浜支店長の
　竹澤　秀樹　氏
演題は「最近の金融経済情勢について」

◇横浜定例講演会
2013年10月3日（木）
14時～15時30分
横浜情報文化センター情文ホール
講師はヤマトホールディングス株式会社代表取締役社長の
　木川　眞　氏
演題は「人と人を結ぶまごころ宅急便～クロネコヤマトの満足創造経営」

視点点描

「聖地巡礼」横須賀で体験

テレビアニメはたまにしか見ない。だが、その舞台の一つが、8月から赴いた支社がカバーする横須賀市と浅からぬ縁があると聞けば、話は別である。県内ではテレビ神奈川（tvk）で毎週月曜午前2時からオンエアされている「たまゆら」のことだ。この人気アニメに関連したウオーキングイベントが8月17日に同市内で開かれると知り、足を運んだ。

「たまゆら」は写真好きの女子高生沢渡楓（さわたりふう）が主人公。アニメでは同市の汐入町が、楓が中学生まで過ごした街として描かれており、今回の行程で主催者側は、アニメの舞台も組み込んだ約10キロのコースを用意した。

アニメの舞台を訪ねることはファンの間で「聖地巡礼」と呼ばれ、アニメツーリズムという言葉が生まれるほどのブームになっている。一方、ウオーキングは高齢社会を迎えて健康志向が高まる中、根強い人気を保っている。

本格的なウオーキングと聖地巡礼。そのいずれも初体験だった筆者にとって驚きだったのは、街に人を呼び込むための観光資源として、両者が「侮れない吸引力」を持つということだ。

日中の気温が30度を超える真夏日にもかかわらず、約1350人の参加者がウオーキングを楽しんだのは、その証左といえそうだ。

ゴールの浦賀駅付近ではアニメ声優のトークイベントを開いたり、同日開催の「浦賀みなと祭」とも連携してアニメのキャラクターをモチーフにした花火を打ち上げ、ファンを喜ばせた。早朝から市内に呼び込んだファンを夕刻まで長時間にわたって滞在させる工夫である。

こうした演出を凝らしたのは、横須賀市、京浜急行電鉄、横須賀商工会議所の3者でつくる「横須賀集客促進実行委員会」だ。今回のイベントでは、汐入駅でアニメの記念切符の販売もしており、鉄道ファンも集客のターゲットとした。ウオーキングコースにアニメの舞台を訪ねる聖地巡礼の要素を織り交ぜたのは、今回が初めての試みだ。

ウオーキング、アニメ、鉄道という3本の矢を束ねた今回の集客効果について実行委は「三つのカテゴリーの愛好者に集まってもらうことができ、従来に比べて参加者の層に厚みができた」と自信を深めている。アニメという新たな主役を得た横須賀の集客作戦にこれからも注目したい。

（神奈川新聞横須賀支社長　宮本　敏也）

宮野　力哉

50周年、おめでとう

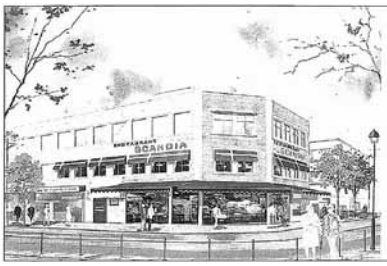
北大路魯山人は自分で経営する料亭・星岡茶寮で使う食器は、ぜんぶ自分でつくった。志野や織部や信楽や唐津など、豪快で格調高い大皿小皿、大鉢小鉢のかずかず。

ボクだって自分でつくってる。多治見で焼いた、白磁や青白磁の丸皿や角皿。信楽のタイルメーカーでは、タイルの生地のフチをちょっと持ち上げて、長大なトンネル窯から出てきたのは長皿や小皿。いいアイデアでしょう。どれもこれも、なかなかの風合い。

赤縞と青縞のガラス鉢もデザインした。そんな食器でお客をもてなして、得意になっている。もっともキザなことすると、批判するヤツがいるのは承知の上で。

それだけではとても足りない。そこで持ち出すのはアラビア、フィンランドのアラビア製陶の食器である。北欧の国がアラビアとはなにごとぞとお思いだろうが、厳寒の人たちは灼熱の国にあこがれて、そう名付けた。

黒に近いほど濃紺の皿、模様もレリーフもなにもない無地。クルト・エクホルムのデザイン。大きいのから小ぶりまで、半世紀ほど愛用していて、どこもキズつかない。これぞグッドデザインである。ボクの家にないアラビアで、かの国のチーズが喰いたいときは、京都祇園の《フィンランディア》へ行く。と、ピルイエル・カイビアイネンがデザインした皿、パラティーンで出される。まさにパラダイスである。



おかげさまでレストラン・スカンディヤは開業満50周年を迎えることができました。
これもひとえに皆様のご支援ご厚情の賜物と厚く感謝申し上げます。

オーナー　濱田八重子

since 1963
SCANDIA
横浜市中区海岸通り 1-1 tel.045-201-2262
http://www.scandia-yokohama.jp

横浜で飲むときはまず、《マリンクラブ》からスタートする。オーナーの山下さん、名は古奈宜さん。万葉集にあるコナギ、もちろん万葉集について話しながら飲む。船乗りの王道をいくパイロット（水先案内人）たちから、いろんなことを聞きながら飲む。目の前に大桟橋。ある日、なんとかいう北欧の巨大な客船が泊まっていた。

北欧。行きたいなーと思いはつのるけど、ふり切って隣の《スカンディア》へ行く。カラヤンやシナトラが座ったという、デンマーク製の椅子を横目に見ながら、ニシンの酢漬けでアクアビットを飲む。ジャガイモでつくるのよと、オーナーの濱田八重子さんに教わりながら飲む。だけど先日、3杯目で意識不明になったので、つぎはなにがいいか迷っている。グラスが置かれるがっちりしたカウンターは、友人の久保宗昭君がデザインした。

《スカンディア》はことし、創業50周年。福沢諭吉がいうように、広告文は広告主が書くのがいちばん効果がある。濱田さんはべつに知的障害者施設《愛の森学園》を創設して26年目になった。

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）

「スカンディア」創業50周年の広告・神奈川新聞２０１３年６月掲載